

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 平沢 竜介

本論文は、王朝文学の形成において、記紀・万葉の上代文学との間にいかなる連続と変化があったのかを考究したものである。論文の構成は、四章からなる。

第一章「上代文学から平安文学へ」の第一節「古代文学における自然表現」では、平安時代になると、自然との即自的一体感の喪失が決定的になり、上代の和歌・歌謡に見られた豊かな具象性が失われ、和歌においても散文においても対象の捉え方が抽象的・観念的になるが、十世紀後半以降、和歌・散文双方において、具象性の回復が見られるようになると論ずる。続く第二節「散文による心情表現の発生」では、平安前期においてすでに散文による心情表現にめざましい発展が見られるとし、第三節「『古今集』の時間」では、『古今集』の和歌に時間意識が尖鋭化していることを析出、第四節「『古今集』の擬人法」では、上代の和歌にはほとんどまったく見られなかったような、事象を理知的に再構成する擬人法が『古今集』において飛躍的に発達することを説くが、いずれも第一節で論じられたことと深い内的連関を有する現象として考察されている。そして第五節において、古今歌風を担う重要な修辞技法である掛詞について、従来の通説とは異なって、初期の読人しらずの歌のなかにも少なからず見出されることを指摘し、古今歌風の形成には、漢詩の影響からだけでは説明できない、新しい表現意識がはたらいていたことを指摘する。

第二章「『古今集』の構造」は、第一章第三節「『古今集』の時間」の論を受けて、『古今集』の歌の配列のすみずみにまで時間意識が浸透している様相を明らかにしている。

第三章「上代歌論から貫之の歌論へ」の第一節「『歌経標式』『万葉集』の歌論から『古今集』の歌論へ」は、藤原浜成撰『歌経標式』や『万葉集』の題詞・左注に見える上代歌論について、前者は中国詩論の詩病論を和歌に牽強に付会したところがあり、後者は個別の歌や表現に関する批評に止まっていて、真に和歌固有のありかたに即し、かつ詩論としての普遍性を有する歌論は『古今集』序において樹立されたと説く。続く第二節「『土佐日記』の歌論」では、『土佐日記』にみえる歌論も『古今集』歌論を敷衍したものであることをおさえ、第三節「貫之の歌論」では、『土佐日記』と同時期に書かれた『新撰和歌』序にことさらに和歌を政教的に意義づける言辞が見られるのは、『古今集』勅撰後三十年を経て、早くも和歌が再び沈滞しつつある状況に対する貫之の危機感のあらわれであると論ずる。

第四章「『源氏物語』と『古事記』日向神話」は、王朝文学の精華ともいふべき『源氏物語』において、その人物造型やプロットのみならず場面表現にまで記紀神話が生かされている事例を丹念に分析したものである。

論文全体の根幹をなす第一章の論述がやや概括的になっている憾みはあるが、研究が細分化した今日、王朝文学の形成について、韻文・散文双方にわたって、上代文学からの連続と変化・飛躍の諸相をトータルに捉えようとした本論文の意義は高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に十分に値するとの結論に達した。